

◎支那文明の本質である「易姓革命」とはなにか？ －・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－・－

支那において王朝の交替する事。易姓とはある姓の天子を廃止して別の姓の者が天子の位につく事。革命とはレボリューションの翻訳語ではなく、本来の漢語では天命が革(あらた)まる事。

古代において姁(ｼ)姓の禹が始めたのが夏王朝であるが、桀(ケツ)王に至って無道をはたらいたため子姓の湯王(トウワ)は武力によってこれを打ち破り新たな天子となり殷王朝を建てる。姁ｼ→子と(姓が易わる)この様な王朝交代を易姓革命という。すなわち有徳者が天命を受けて天下を統治すべきであり、徳が衰え民心が離反するようになれば、天命はそのものを去って別の有徳者に下り、ここに易姓革命がおこることとなる。革命説は易経の革卦に基づきその後孟子によって理論化され春秋公羊伝(クワゲン)によって補強され、さらに漢代の董仲舒の春秋繁露に至ってより完成の域に達した。

———— (百科事典数冊より抜粋)

このように百科事典に書かれた事柄を少しずつ分解し、現在の日本との関わりを考察していきます。各王朝での **易 姓 革 命** のあり方を論じる事は歴史学の範疇なので割愛し、ここでは別の視点から個々の漢字が持つ概念で現代につながる事象を、読み解いていきます。まずは上記の漢字の意味からなにが見えてくるのかを考えて見ましょう。

【第一章 姓という概念】

※1 ここでは漢字文明として支那文明の中に朝鮮・ベトナムも含めます。

① 姓とは何か

本来の概念…東アジアの漢字文明圏※1 で用いられる血縁集団の名称。

我々も漢字を使っているが、本来の概念とは違う使い方をしている場合が多い。この姓という漢語もその一つ、日本人には、同じ漢字なので同じ概念と思う悪い癖があります。

例えば私の苗字「村上」は Murakami という固有語であり、金や朴という漢語ではありません。

漢字文明としての「姓」の概念は東アジアの支那・朝鮮・ベトナムにのみにあります。

ベトナム人のグエンは阮、ホーは胡という漢字名、朝鮮と共に漢字を捨てたので分かりにくい。

しかし、モンゴル人・チベット人・アラブ人など大部分のアジア人には名前しかありません。モンゴル人の相撲取りも名前だけです。意外に、多くの日本人はこの事を知りません。

例として以下、横綱白鵬の父の名と彼の名前の関係。前の名前はお父さんの名前なのです。

『祖父ジグジドゥ・父ムンフバト→息子白鵬ムンフバティーン・ダワージャルガル』イーンは～の子という意味。父の名ですから白鵬にムンフバティーンさんなんて呼びかけたら変です。ダワージャルガルさんです。

即ち、姓や苗字がないという事は日本人が当たり前と思っている～家という発想が無いのです。

この事を歴史的に考察すると「姓」が無いのだからモンゴル王朝に易姓革命は起らないという事がいえます。実際チンギス・ハーンのお墓もどこにあるかは分かりません。

元朝は滅びたのではなく単に北へ帰り普通のモンゴル王朝に戻っただけなのです。そうであるから元朝史は明代の漢人が書いたもので本来のモンゴル史ではありません。

あくまで王朝正史であり明朝の易姓革命を正当化するための前王朝の「正史」なのです。

(この辺りは司馬遼太郎の『草原の記』、『モンゴル紀行』を読んだ方はお分かりだと思います)

でも我々はどうなのか？という話の前にさらに姓にまつわる話をつづけます。

夫婦別姓』とか本来の『姓』の概念と『苗字』の混同をさけるためにも、以下の支那文明における『姓』の概念について、面倒ですが読み進んでください。ここが一番のポイントです。

◎漢姓の定義（姓をキーワードに、現代に続く支那文明の原則の説明）

【姓不変の原則】（女性でも姓は一生変わらない）

直系男子のみでの血の継承が「姓」の概念であり古代の同一の始祖から一系統で続く血族の集団である（朝鮮はここに「本貫」を加える）。例えば言葉も通じない遠縁でも二千年前に同一の祖先であるとなれば同じ「姓」の一族となる。したがって支那も朝鮮もベトナムも結婚しても「姓」は変わらない。子供は必ず父の姓を名乗るまた、各々の姓の始祖は王族などであり神話的な物語もある。この様に支那朝鮮ではずっと夫婦別姓であり夫婦同姓を選択することはできません。

【同姓不婚(娶)の原則】現在も支那朝鮮人はこの原則を守っている。「王」同士は結婚できない。朝鮮では姓の数が少ないのでここで本貫※2を表明する。本貫が別なら「金」どうしても結婚できる。例えば、金海(本貫)金氏と慶州(本貫)金氏は結婚できる。始祖が違うから可能。ベトナムもほぼ同じです。 ※2 韓国では本貫を略してポンといい、同姓どうしは初対面でもあなたのポンはなに？となるそうです。男女は必ずこの確認をします。ポンが同じなら恋愛できませんから。

【異姓不養の原則】（異なる姓の者を養子にしてはいけない）

異姓すなわち他の直系一族からは絶対に養子をとってはいけない※3。直系男子での血の継承を乱せば、支那文明の一員とはみなされず重い刑罰を受けた。

もし養子をとる場合は同じ姓の男性一族で血の濃い順番、甥っ子・甥っ子がいなければ又従弟と優先順位が決められている。母系は絶対にダメ。母方のいところは血縁とはみなされません。

※3 王さん家は陳さん家から養子は取れないという事、徹底した血統主義です。

【昭穆相当 しょうぼくそうとう】

日本のように家を絶やさないために孫が祖母へ養子に入ったり、長幼の序を乱すことをせず、必ず子の世代の同姓血縁者を養子に迎え入れなくてはならないという原則。父方の甥の世代ということ。

このように厳格な掟があり、江戸期の日本人のように他家に養子に行くのは正に「犬の子」と支那朝鮮人は思うそうです。我々が思う「姓」とはかなりの隔たりがありますね。

「姓」についてのまとめ。

支那文明は強烈な男系社会であり、日本のように母系もある双系社会ではない。

直系男子をさかのぼっていけば古代の王族などに行きつき、その先には皇室のような神話めいた伝説を各一族が持っている。そうであるから前出の原則は絶対に守らねばならない。

例えばある王氏は「新」王朝を建てた王莽の末裔など、古代王朝の王に源流を求めている。

『近代史で』ここから読み取れることは、支那文明の中に生きていれば誰でも皇帝なれるチャンスがあったという事です。

現に 1915 年、袁世凱は中華帝国「皇帝」を宣言しています。

これも歴史の授業では単に袁世凱が狂ったように説明されましたが、「袁」という「姓」に天命が下ったと取り巻きの儒者が認めたわけです。彼らは本気で帝政を目指していました。

それほど姓というものは支那文明の根幹をなす概念なのです。この点だけでも我が国とは全く違う文明だといえます。

【第二章 日本の姓との比較】

根本的に支那文明を受け入れなかった事で、現代日本人は姓の概念を意識せずに生きています。

では、前出の「姓」の概念を頭にいれて日本人との比較をしていきましょう。

【日本での姓の発展】

古代における姓の始まり。

氏(うじ・蘇我、春日、物部、中臣など) から始まりそれぞれの一族は共通の氏神様を祭っていました、姓(かばね・臣、連、公、村主、国造) は大陸的な姓ではなく、官位を表す呼称です。

そして、代表的な源氏、平氏、藤原氏、橘氏などの氏族に整理統合されていきます。

ほとんどの日本人が家系図を作る際にこの源平藤橘、四つの姓をルーツとします。

しかし、これらも漢姓とは同じではなく、類似しているのは男系相続が基本である事位で厳密な原則がなく、次第に字(あざな)のような苗字の原型となる呼称に置き換わっていきました。

【我が国における苗字の発生】

「みょうじ」は時代によって「名字」と書いたり「苗字」と書いたりしますが、最初のうちは「名字」と書いたようで、これは「名田」などと同じで、農地の所有名義という意味から出ているようです。これが、江戸時代に入るところまでには「苗字」に変わったようです。

一般的には「血統を同じくする＝同じ苗に属する」意味だと理解されていますが、直系男子での血の継承は時代と共に薄れていき、農村地域共同体や職能集団の要素が強くなっていきます。

「family name」というものを世界的な一般論として語る場合に「血統姓」「地名姓」という概念を用いる事があります。「苗字」は、少なくともその起源においては「血統姓」である「姓氏」に対立する「地名姓」なのです。日本人は単位人口あたりの「family name」の数が世界一多いと言われていますが、それは「地名姓」が発達したことによるものです。

このように、結果として、支那文明の姓の概念から遠く離れてゆきます。

(郷土史家数名の文章より抜粋)

『日本史では』この「漢姓」と言う概念はなく源平藤橘も最終的には天皇や神話の神々へ繋がる家系図となります。また、武士以外はことさら直系男子を意識していないので完全な血の継承のも薄く、全体としては母系もある双系社会を維持していく結果となりました。

また、支那文明以外の諸民族と同じく、当時からのほとんどの庶民には苗字はなく、どこそこ村の何べえといった名前だけで、皆が苗字を持つのは明治時代のことです。

明治はじめの人口はおおよそ 3,000 万人と推定され、そのうち苗字を名乗っていたのは 350 万人ほどしかなく、苗字の数は三万だったといわれています。

(簡単に説明しますと) 徳川家康のフルネームは

源	朝臣	徳川	次郎三郎	家康	
(氏)	(姓かばね)	(苗字)	(字あざな)	(名)	となります。

(結果)

【日本の「family name」の成立】

同じ苗字を直系相続ではなく一族皆が名のすることで、意図せず支那文明と決別した。
期せずして欧州人のような family name に近いものとなった。

【第三章 苗字の文明史的考察】

日本のようにコロコロ変わるのは「苗字」で一生変わらないのが「姓」です(韓国人を思い出して!)。
そうであるならば、日本の「歴史」にどのような影響を与えているのか考えて見ましょう。

そもそも、万世一系の皇室には「姓」はありません。また、臣民も各自が独立した始祖よりの「姓」を持たないし、そういった概念を理解もしていません(そう言い切ってもいいでしょう)。

由って日本には易姓革命は起きないのです。依り処の「姓」がないので革命しようがありません。
足利義満は日王にはなれなかったし、戦国武将も皇位を狙うという発想を持ちようがなかったの
でしょう。

このように個々人を規定する概念が違う事により大陸とは一線を画す歴史を持つことになりました。

【姓と苗字の概念の違いで読み解ける歴史的・時事的出来事】

ここまでの考察のなかから、現代の諸問題を読み解いていきたいと思います。

①『反日プロパガンダへの返答』 問い:「創氏改名」で日本人は朝鮮人の名前を奪った。

答え: 奪ったのではなく強制的に日本の戸籍制度に組み込んだ (1940 年)。

例えば「金」という「姓」の男性が「金」という「氏(苗字)」に自動的になるという事、これが
創氏ということ。ほとんどの朝鮮人は何もせず苗字に変わったとは思っていませんでした。
見かけ上男性の名前は変わらないが結婚すれば、女性は「日本的 family name」となり「高」と
いう「姓」の奥さんも「金」という夫の「氏(苗字)」を名乗る事になります。当時、周知の期間
が短く、結婚して初めて気づくことも多かった。(このあたりを知らないと感情的な議論になる)

そして強制ではなく、自己申告して「金本」とするのが改名である。この場合も戸籍から元々
の本貫(金海とか慶州)と姓の金が抹消されたわけではなく、「family name」を追記しただけです。

	(妻)	(夫)		(同じ苗字)		
朝鮮の戸籍	高	金	→日本の戸籍	金	戸籍を抹消して日本人に仕立てた訳ではないが、 創氏(苗字)は強制(内鮮一体は国の政策)であり、 このように一種の文明の衝突がおきました。 お互い違う文明との意識も薄かったのでしょう。	
	英	正		英		正
	淑	日		淑		日

名前を奪われたとの誤解は今も続いています。しかし歴史的な経緯を知ればそうではありません。また、朝鮮人の側から日本人にしてくれと頼んできたという説も大間違いです。(これも右側からの悪質なプロパガンダではあります)そして名前を無理やり日本式にさせたとの強制論も大間違いです。要は戸籍法の適範囲拡大問題なのです。しかし当時の内務省も周知する時間もなしに強行し、敗戦と共にうやむやにってしまった事が現在の通名問題にも影響を与えている事は知っておくべきでしょう。罪な政策を出したものです。



【社会問題】 夫婦別姓問題。

日本における議論は「姓」と「苗字」を混同している事で、議論の歯車が狂っています。議論は夫婦別「苗字」なのか「姓」なのか？皆が、訳が分からず議論しているように思います。

【結論】「姓」はもともと別なのだから、別「苗字」を主張しているのであろうが、文明論や戸籍法の観点からも「苗字」日本的「family name」は別にはできない。

その土地に生きる血族又は配偶者や養子が皆で一つの「苗字」を名乗ったのが始まりであるから、それを分けたり別にして暮らしたりは出来ない。一つの名のりだから「苗字」であるという歴史的な事実をマスコミ文化人は知ってか知らずにか語らない。また、支那朝鮮人が別姓で素晴らしいなどと言う困った文化人は今も健在である。(別姓がいいなら、韓国礼賛になりますね)

◎この点、ネットで「夫婦別姓・韓国・戸籍制度」などで検索してみてください。とんでも珍説満載で笑えます。今まで私が提示してきた事を世間は全く理解していない事がよくわかります。

【以下、解決策としての私的提案です】

- ①漢姓のように姓を固定化する…みんなで漢化する。個々が男系一族となる。女系はない！
- ②苗字をやめて名前だけにする…これでモンゴル人やアラブ人と同じ。個人主義の極みですか？
- ③婚姻のたびに新しい苗字を作る…これは福沢諭吉も提唱していたそうです。離婚しにくくなる？
- ④戸籍はそのままにしてミドルネームとして身分証などにも旧姓(苗字)を表記する。一番簡単。

別姓論者は、同姓も別姓も並列的に戸籍制度に含めろと言いますが、同姓になる前提でコンピュータ化されている現在のシステムを変更するならば、莫大な人的費用がかかる事必死です。

子供が父系、母系で別れば、戸籍をたどっていくことが非常に複雑となり相続も大変になります。最近では、戸籍制度そのものの廃止を狙っている勢力がいるのではないかと勘繰っていますが…。

他にも、一族のお墓のある家は、別姓(別苗字)の奥さんや子供はどうするのでしょうか？

中途半端に別姓にすると死に際に子孫に難しい問題を残すことになるので、解決策としては苗字をやめて個人の名前一つにし、一族にまつわるしきたりの全てをやめてしまう事しか解決策は無いように思います。墓も全て個人墓です。それでいいのでしょうか？苗字にこだわれば結局双方の「家」どうしの問題で終わってしまうとしか思えません。

そして、この議論は根底で 1940 年の創氏改名とつながっています。当時の政策の全く逆の「別姓」を手放して認めたら、漢姓文明のまま簡単に帰化できる事につながるのです。そして戸籍法の中に別系統の概念が盛り込まれ先々で日本文明の衰退につながります。

◎雑学としてこんな話題もいかがでしょうか。

姓≠氏（苗字）、他にもこの概念の違いを感じる事例を提示してみます。

【企業風土】

中国や韓国はそもそも「family name」がないのだから「本田」や「豊田」のように創業者の苗字を冠した企業名はあり得ない。これができるのは欧米と日本だけである。実際ないでしょう？

【漢姓の強み】大陸批判だけでなく、文明として良い点もあります。

華僑は直系男子の血の継承を続けていけばいいのだから何処ででも子孫を繋いでいける。現地の女性に子供を産ませ、漢字を使って文化をつなげばどこででも生きられる。日本人は「family name」だから苗字だけ残って中身は現地人となっていく。日僑・倭僑が居てもいいのに居ないのはこの為。

このように文明が違えば、個々人の生活そして一族のあり方まで全く違うものになっていく事が分かります。日本人は簡単に婿養子とか言いますが支那朝鮮でそんな事はできないのです。

【第四章 革命という概念】

◎支那史では天命が下るとは実際の生活、それも生死にかかわる事である。天命が下らない、徳のない人物だとなれば、統治者として認められないばかりか一族は皆殺しにされる。日本にはこの様に政治的な天命の解釈はない。短命な王朝の攻防は革命(天命が革^{アタ}まる)という名の政治闘争である。そして天命が下った皇帝が天子さまとなり徳のある政治を行うのである。

追記次項『韓国における易姓革命』

李成桂は1393年に中国の明から権知朝鮮国事（朝鮮王代理）に封ぜられた。とウィキペディアにあります。この後、易姓革命が明皇帝（明の儒者たち）に認められ朝鮮王として即位します。

属国というより支那文明の一員になったという要素の方が強いのですが、やはり認めたのは明朝です。このように文明とは民族を超えて一つのシステムとして作用するもの、日本は別文明との証明。

引用します。以下『岡田英弘著「日本とは何か」 p 111 より』

およそシナの「正史」というものは、ある原理を厳格に守って書かれるもので実際に起こったことだからといって、なんでもかんでも書くものではない。「正史」はたんなる史実の記録ではないのである。「正史」を貫くものは「正統」の原理である。「正統」は現実政治の観念であって、現在の政府がシナを統治する権限を、前政権から合法的な手続きを踏んで移譲された、という事を意味する。この現政権の「正統」性を証明するために書くのが「正史」なのである。 以上引用

このように易姓革命を正当化するために盛んに王朝正史が編纂されます。例えば隋書は次の王朝の唐代に編纂される。「正史を編纂する」すなわち、これが東亜における歴史の始まりなのです。歴史と History(西洋)同じではない。現在 History の翻訳語として「歴史」という言葉を使っているので混乱するが、アジアには支那文明と日本文明にしか「歴史」はない。

そもそも我々が義務教育で習ったのはマルクス史観に基づく History であって、支那文明の「歴史」ではない。何のために古代支那人が歴史を書き残していく必要があったのか考えるべき。

岡田英弘著書で知ったのですがインドには歴史の概念がないそうです。ヒンディー文明は時間軸もあやふやで輪廻転生が持ち込まれると歴史は書けないそうです。

◎王朝正史とは正統性(Legitimacy・Orthodoxy)の証明。決して正当性(Justice・Fairness)ではない。

正統性を縦軸に、正当性を横軸とすれば、各王朝の歴史は正統性のみである。仏教やキリスト教の中から出てくる民族を超えた正当性の理念では支那文明における「歴史」は読み解けない。したがって「歴史」は王朝の正統性のためだけに書かれた物語ととらえるべき。

【この概念の違いで読み解ける歴史的・時事的出来事】

【南京大虐殺】

これは国民党時代に起こったことであるのに、共産党政権は盛んに反日プロパガンダを仕掛けてきます。これも前王朝からの正統性ととらえれば納得がいきます。

革命とは都合の良い事は引き継ぐのです。そして、30万人などという荒唐無稽な数も正統性を補完する重要な要素となってきます。ですからいくら正当性でこちらが反論したところで、正統性の証明のためには、嘘をいくらついてもいいという文明なのですから屁とも思っていないのです。

【韓国の反日運動】

大韓民国の起源は「三一独立運動」にあると憲法にも謳われています。

これを天命が下ったスタートとすれば、当時の伊藤博文公暗殺や重光葵大臣などへのテロ行為もすべて王朝正史と捉えられます。ですからテロ行為を「義挙」と教科書で教えているのです。

前出の創氏改名も含めて、彼らの反発は違う文明圏の奴らにやられたとの根源的な異質感からきていると推定されます。これが支那人による統治ならば同じ文明圏なのである程度納得するのです。

【韓国の大統領追訴】

前大統領を死刑にしたり、追い詰められて自殺したり、弾劾されたり。正に5年に一度の易姓革命。革命とは過剰な正統性を求められる事なので、あそこまで追訴するのです。

【第五章 我々の正統性。日本文明の中心としての皇室】

ここまでの支那文明との比較で、姓や苗字を持たない皇室とはいかに奇跡的存在かが分かります。そして我々の持つ『苗字』もアジアにおいて如何に奇跡的に成立したのか、不思議なことです。

現代の国際関係の中で、共産主義だとか民主主義だとか近代の概念で理解している出来事の背景に、その文明固有の歴史的背景があるはずです。ある出来事に対して日本人と支那人はかなり違った対応をします。それこそが近代をこえた民族の精神(エトス)だと思います。

我々の氏姓が全て古事記の神々や天照大神の子孫である天皇の血筋につながっている。この事は「陛下の赤子」として戦争に利用されたといわれ、戦後教育のタブーとされてきました。

しかし、事の重要性は易姓革命との比較で浮かび上がってきます。民族とは血筋なのです。それもDNAといった人種的な事ではなく、文明の違いからくる血筋なのです。

異民族でも直系男子の思想を捨て、日本で婚姻を繰り返せば、母系と混ざり、ほぼ神話の血筋となります。それが現代戸籍に集約された思想なのです。これは、無意識に作り上げられていった日本文明の根本概念なので議論すらされません。そうであるからこそ強く民族を結び付けているのです。

我々日本人が直系の先祖を意識せずに生きている、その背後には八百万の神々にそして天照大神に連なる大きな血の流れがあるから私たちはここに存在しているのでないでしょうか。

各文明には始まりに神話という虚構を持ち、その形がのちの文明をつくっているのです。ですから古事記・日本書紀などの神話は我々現代人の生活も規定しているのです。

歴史学的に、河内王朝は別の王朝だったとか、聖徳太子はいなかったとか、そういう議論はネタとして勝手にやればいいし学問の自由でもあります。しかし、それだけで本質を知ったような気分になり皇室を軽んじたりする輩が多すぎます。民族を繋ぐには大いなる虚構が必要であり、一つの虚構を失えば別の虚構に取って代わられます。皇室を失えばオウムの様なカルトが蔓延する不安定な社会になってしまう事は間違いありません。

キリスト教、イスラム教、仏教、全てが大虚構ではないですか。マルクス主義による唯物史観からは何も生み出しませんでした。戦後洗脳を捨て國體を取り戻すためにも、より客観的な視点で日本を滅ぼすための様々な言説に反論していかなければなりません。

主張のポイント：支那・朝鮮の正統性の主張には、たとえ話がかみ合わなくでも「正当性」ではなく我らの正統性で反撃すべきです。客観的事例での反論（正当性）は彼らには通じない。

【主張すべき我らの正統性とは？】國體という言葉はほとんどの方に通じないので使いません。

①支那人とは同文同種というリップサービス外交をやめ、我らは全く違う文明だとまず分らせる仕掛けを作る。そうであれば平成 10 年宮中晩餐会での江沢民のような無礼な態度を取らせることはなかったはず。今上陛下は世界最古の君主なのだから、人民服ではなく礼服を着なさいと指導すべきだった。また、それを段取りできない外務省も当時の内閣もどうしようもない組織です。

②南京大虐殺などへの反論も当時の皇軍は軍規も整っており虐殺などあり得ないとの正面切った主張を全面的に押し出す。八紘一字の皇軍が支那人民を保護しに行ったのだ！と。各論で正当性をいう。そんな人数を殺せるわけがないとか、そういう議論の進め方は彼らに通用しません。そもそも議論をかみ合わせようとすること自体が不毛な行為です。

③韓国人に対しては、陛下への非礼をやめさせる。例えば日王という表記を一切やめない限り今後天皇陛下にはどの大統領も逢わせないと、我々が正統性を主張し続けていく。相手に伝わるように説明をしたらいいとは思いますが、相手におもねる必要もありません。

④従軍慰安婦についても皇軍は一切関与していないと突っぱねる。衛生面に関してのみ保健機関が関与していたが、あくまで性病予防のためだけである。それ以外の全ての議論に乗らない。

要は、同じ「歴史」を共有していない。我々は独自の文明であるという事がポイント。

仮に共有していたとすればそれは「大日本帝国臣民」であった事であり、それを強制占領と言い張れば日韓に共通の「歴史」などなかった事になります。今の日韓問題の本質はそこでしょう。

【最終章 本当の敵は日本人】

日本人の最大の敵は日本人です。皇室を滅ぼすことにつながる議論は根気よく潰していかななくてはなりません。敵は本能寺どころかその辺にウヨウヨいます。

皇室を貶める様々な動きに反論していく必要がありますが、ここでは易姓革命との比較に絞り、女系天皇論者への反論の論点を提示します（論破の参考資料としてください）

【女系天皇論への正統性（國體）の主張】

女系容認論者の主張①：天皇の血が母から息子に伝えられても皇孫としての尊厳は失わない。

（反論）なぜ天皇だけが直系男子の血の継承を繋いでいるのか。それは支那文明に照らし合わせたときに彼らの皇帝は直系男子の継承であり古代文明で普遍的な発想であったという事。そして支那文明は父系相続で姓が変わらない事。当然古代の権威もそこに求められた事。

天皇だけが直系男子での血統相続であるからこそ、逆説的に、それ以外の臣民は婿養子をとって女系相続をしたり、他人を養子にしたり世界的にも融通無碍な「家」制度を維持してこられた事を知るべきです。これは正統性を全て天皇に預けた形とでも言えます。

天皇が女系になればそれは易姓革命であり別王朝となる事は、今までの説明でご理解できたはず。そんなものは天皇でもなんでもなく、単なる歴史の残りカスでしかありません。

女系容認論者の主張②：男系の維持は女性差別につながり、現代では認めがたい。

（反論）第一章で説明した同姓不婚の原則で説明する。皇室には皇族の女性が嫁ぐ事が多々あり竹田宮家も血筋が遠いので皇女が嫁いでいますし。香淳皇后は久邇宮家出身、天皇直系の女子です。支那文明的には同族婚の野蛮な風習となります。

これらの事実は皇統という細い糸を繋ぐために女性が血を濃くしてきたわけであり、限りなく女系に近い父系なのです。

そして日本文明を繋いできたのは皇族女性であったことは伊勢神宮での祭主黒田清子様のご活躍を見ても分かる事です。天皇が一系だからこそ、我々は支那文明から離れ自由に暮らせます。我々はいとこ婚が可能です。支那文明では同族婚としてあり得ない事です。その点も皇室が一系で続いているお蔭なのです。一系が崩れれば、俗だけの卑しい民族になり下がります。庶民の中に血統の原則が無いのですから当然です。

以上、にわか仕立ての文明論ですが、皆様の勉学に役立てば幸いと存じます。